

なかま

No.96



2025年4月 春号

団委員長のことば	1 頁
RoverScout Workshop2024	1 頁
BS 隊 10 月隊キャンプ	2 頁
BS 隊 一級挑戦キャンプ	3 頁
BS 隊 1 2 月班キャンプ	6 頁
団行事 スキー訓練	9 頁
VS 隊 冬山登山	18 頁
RS 隊 卒団を迎えて	29 頁
Last Message from B-P を読んで	31 頁

発行：日本ボーイスカウト東京連盟町田地区町田第 13 団 広報委員

- ※ 写真は BAND、13 団 HP、投稿から転載しました。
- ※ 作者本人の原稿通り記載してあります。
- ※ 次回、No.97 号発行予定は 7 月ごろ予定しています。

『地道に取り組むことの大切さ』

団委員長 田地 司

13 団の活動年度は9月から8月までですが、日本連盟の登録年度は4月からとなっています。来年度（2025 年 4 月から）の 13 団のスカウト登録人数は、前年比マイナス 9 名で 27 名となりました。これは、RS の 5 名が卒団することの影響が大きいのですが、それを差し引いても実質 4 名減となります。ただ、ここにきて大変うれしい傾向は、新たに迎えたスカウトが 7 名となったことです。これはもちろん組織拡充委員の皆さんやなによりスカウト、リーダーの力が大きいのですが、ではそんなに変わった募集活動をしているかと言えば、特に大幅に変えたわけではありません。春の潮干狩り、泥んこラリーやいろいろなお祭りなど毎年同じ行事を地道にやってきたことが入隊につながっているのだと思います。実際、一昨年のは泥んこラリーはゲスト 0 でした。昨年は、なんと 13 名。こんなことを繰り返しながら、スカウト活動を広めていくことが実を結ぶのではないのでしょうか？

3 月末のさくらまつりを皮切りに、4 月には雨で延期した「ハンターゲーム」を、1 団、6 団、9 団と合同実施します。100 名を超えるスカウト、リーダーがこどもの国のフィールドに展開します。楽しいプログラムを大いに見せて、宣伝して「ボーイスカウトってこんなに楽しいんだよ」と生き活きと活動していきましょう。それが、13 団の趨勢にかかわることと信じています。



『RoverScout Workshop2024 に参加して』

RS 隊 米澤 陽良

これを読んでいる皆さんは、「災害」についてどれだけ知っていますか？昨今、日本では様々な地震が発生していることはよくご存じだと思います。しかし、実際の災害の現場がどれほどだったのかということまではよく知らない人も多いと思います。今回の RSWS では、実際の避難所を想定した訓練を実施しました。

初日には、カードを用いた HUG という避難所運営シミュレーションを実施しました。この時点で、どの参加者の顔にも焦りと不安がまじりあっていたことを思い出します。そして、それを実際に屋内で運営したのが 2 日目となります。避難所では、様々なニーズが飛び交い、焦りからか避難者からも大きな不安の声が出ていたことを覚えています。

この訓練を通して、通常の生活を逸脱した際の尋常ではない焦りと、逆に一呼吸おいて、冷静に対処することの重要性を学びました。また、昨今では災害が増加してきており、災害大国日本では、どこにいる人も被災、避難所運営への参画をする可能性があります。今回の訓練のように、改めて「災害」と向き合うことの重要性を理解し、それを仲間たちへも伝えていかなければならないと感じました。

ボーイスカウト隊キャンプ 感想文

2024 年 (R6) 10 月 13 日～14 日

BS 隊 10 月隊キャンプ

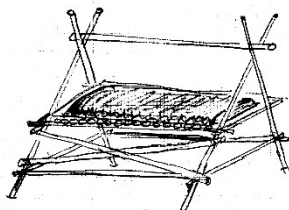
小野路キャンプ場

『10 月隊キャンプ作文』

BS 隊バイソン班 佐々木 大和

10 月隊キャンプで特に心に残ったのは、たちかまの制作です。たちかまは、最初普通に作っていましたが、途中で素材が足りないことにきずき、三脚のたちかまを作ってみようということになりました。三脚のたちかまは、素材が少ないので作るのが簡単でしたし、頑丈に、そして軽量に作り上げることが出来ました。素材が足りないという事で思わぬ発見ができて、普段より丈夫にできたので心に残りました。夜にはベンチャー隊が焼き芋を焼いてくれて、違う階級と団らんが出来ることは素晴らしいことだと感じました。

10 月隊キャンプでは、ミスといっっては何ですが間違いから学ぶこともあったし、いつもよりまったりと、だけれど時間は間違えずに過ごせたのでこの後のキャンプも10 月隊キャンプのように過ごせたらいいなと思いました。体験してほしい。その姿を親御さんに見て頂いて素晴らしい子育てをしてほしいと思いました。



『10月隊キャンプ』

BS 隊バイソン班 佐々木 海利

私は今回隊キャンプに参加し、ムダを省くことの大切さを学びました。

今回はスカウトとしての新たな一年が幕を開けてから初めてのキャンプでした。本当に久しぶりのキャンプだったのですが、時間をあけてしまったことが原因だったのか、今までと比べものにならないほど、時間にルーズだったと感じています。とにかく、作業の間のムダな時間をもっと減らしていれば、時間のズレも少なかったなと思います。

先輩がいない今、自分を管理するのは自分なので、どうやったらより効率的な行動できるかを良く考えて、後輩の技能向上のためにも、まずは自分が今までやってもらっていたことをやってあげるということを意識していきたいです。

もうすぐ菊上進を向かえているので、きりかえて活動していこうと思います。

『10月隊キャンプ』

BS 隊バイソン班 廣石 權

今回自分はこのキャンプで自分が成長していることを実感しました。前のように上手いかなかったことが、仲間と協力して達成できていたように感じました。立ちかまども工夫して一年前や二年前より大幅に早く丈夫につくることができたと思います。後輩も二人程増えるらしいので、先輩らしい姿を見せることができるように努力していきたいです。次回以降も引き続き工夫していきます。料理に関しては半年前くらいから急にまともなものが食べられるようになったと思います。ですが自分は以前からあまり成長をしていないと感じているのでこれから頑張っていきたいです。とはいえ夏キャンプの頃よりは成長していると思っています。忘れ物もあまりすることが無くなりました。以前よりも他の人に迷惑をかけることが少なかったと思います。それは昔の目標でした。今は他の目標を見つけなければいけないかもしれません。

2024 年 (R6) 11 月 16 日～17 日

BS 隊 1 級挑戦キャンプ

小野路キャンプ場

『一級挑戦キャンプ作文』

BS 隊バイソン班 佐々木 大和

まず、荒先輩と廣石先輩が遅れるとのことでかいりと二人でキャンプ場に向かい、二人で設営をしました。この時では二人だったのにも関わらずに素早く、そして綺麗に設営をすることが出来ました。しかし、ぼくは食テンのペグの打つ角度がわからないのでこの時にポールを支えながらも、かいりの行動を観察して学習することが出来ました。設営の時からも一級挑戦キャンプらしく学習ができたので良かったと思います。しかし設営が終わって少し休

んでいるときに、かいりが具合が悪いらしく吐いてしまったので、そのまま先輩たちを待ちました。その後に廣石先輩が来てかいりの体調も回復し、午前のセッションが始まりました。セッションでは保存食の種類や、保存食ではない食べ物の保存方法を学び、さらに防水マッチを作って実際に使えるかどうか確かめたりしました。防水マッチは無事成功し、次に「保存食ではない食べ物の保存方法」のひとつの「豚肉のみそ漬」を実際に作りました。夕飯にはそれを食べました。とてもおいしかったです。そして午後のセッションでは、またしても午前のセッションの「保存食ではない食べ物の保存方法」のひとつの「魚の干物」を作り、二日目の朝ごはんにしました。作った時の感想は魚は骨があり時々骨が手に刺さったりして大変でしたが無事開くことが出来てよい学習になったと感じました。

二日目には朝のセッションで火起こし競争をしました。この火起こし競争では宮下君も参加してもらい、とても盛り上がった楽しい時間でした。宮下君はかいりに手伝ってもらっていたものの、初見でも火起こしがとても上手く、負けてしまったので次回の火起こし競争では負けないように頑張りたいです。火起こし競争をしている間にいつの間にかカブ、ビーバーが来て昼ご飯の時間になりました。昼ご飯では炊事具を使わない牛乳パックを使ったホットドックを作り、さらにツイストパンを食べました。ツイストパンは今田リーダーにこねてもらいましたが、ホットドックはボーイスカウトで仕切ったので、体験にきたカブ、ビーバーのお母さん、お父さん方に良い姿を見せることができ、入隊した子もいたということなので一級挑戦キャンプ二日目は楽しいこともあったし、隊としての良いこともあったので成功して良かったと思いました。

一級挑戦キャンプではセッションなどで学んだことがたくさんあり、一年前にやったところと同じ内容のところもありましたが、改めて学習して深く自分の生活にかかわっているということが学べました。



『一級挑戦キャンプ』

BS 隊バイソン班 佐々木 海利

今回私は一級挑戦キャンプで自分の現状を再確認することが出来ました。

今回一級挑戦と言えど、挑戦するスカウトはおらず、一級はスキルの再確認、初級は二級へなるためにどのような事をするべきかの勉強をするための良い機会だったと思います。

私自身、一級への上進を果たしてから早数か月、特に新たな技能の習得はしてきませんでした。しかし、今回のキャンプで再びスカウトとしての勉強をただでなく、見学でくださったゲストの方々に、自分たちは何なのかを説明するにあたって、今だ自分が意識できていなかった事にも気づかされました。

良きものはとは、何かを教えるだけでなく、自らが学ぶ姿勢を見せる人だと実感したことで自分が一級スカウトとして見せるべき姿を確立できたキャンプだったと思います。今回学んだことを菊上進にも活かしていけると良いと思いました。

『一級挑戦キャンプ』

BS 隊バイソン班 廣石 權

今回自分は技術の足りなかった所が多々あると感じました。料理はまあ問題無く出来たのですがその後の片づけに少し手間取ってしまいました。セッションでのアジ開きは、前の一級挑戦キャンプと比べるとかなりきれいに開くことができたように感じました。二日目のセッションでは、最初の火起こし大会ではやはりあまり組み方を勉強していなかったもので、早く火をつけることができませんでした。ですが、これも前のキャンプよりは成長しているなと感じました。結果的に何十分も火をつけるのにかかってしまいましたが、順位は一応最下位ではなかったので、これから頑張っていきたいです。やはり火起こしなどの苦手な技術を上手く使えるようにしたいです。宮下君や、藤木君たち後輩も新たにできたので後輩に見せることができるようにこれからも技術を習得していきたいと思います。



2024 年 (R6) 11 月 30 日～12 月 1 日

BS 隊 1 2 月 班 キャンプ

小野路キャンプ場

『十二月班キャンプ作文』

BS 隊 バイソン 班 藤木 亮成

ぼくはボーイ隊になってから初めての班キャンプに行きました。最初の集合場所は、ころころ広場ころころ小春祭の当日で他の団体などが小春祭の準備をしているのでぼくたちはたちかまどを作りました。そしてリーダーからかくしばりを教えてもらいました。たちかまどを作った後は電車やバスを乗り小野路キャンプ場につきました。そのあとキャンプ場のせつえいを始めました。。しょくてん、テントなど組み立てる道具がたくさんあっていろいろ大変でした。次に二日分の水を運びました。とても重かったです。その水はごはんを作る時の水と食器を洗うときの水に使いました。そうこう過ごしていたら朝になりました。とても寒かったです。その後朝ごはんを食べて帰りのバスに乗ってかいさんしました。

ボーイ隊入ってから初めてのキャンプでしたがとても楽しかったです。



『12月班キャンプ作文』

BS 隊バイソン班 佐々木 大和

12月班キャンプでは宮下君と藤木君が参加して、いつもの先輩がいない、少し大変なキャンプを実地しました。このキャンプではいつもと違う「班キャンプ」なので水もポリタンクを用いて自分たちですべてをこなす少しと言わず大変な、そして自由で楽しいキャンプでした。キャンプの前に祭りがあり、たちかまを制作してから出発するということで初めから少しドタバタしていました。たちかま制作では藤木君と宮下君が巻き結びと角縛りができないようで、宮本リーダーに教えてもらっていて、理解していざやってみると意外に上手にできていてびっくりしました。特に宮下君は一度覚えたらものすごく上手にできていて、楽しんでくれている証拠だと思いうれしかったです。祭りでは安価でサツマイモが売っていたらしいので、なるべく価格を抑えたいという事でかいりが買って、夜ご飯に回しました。目的地に向かう間のことは飛ばして、水くみのことを書きます。水くみでは、水が満タンのポリタンクが思ったよりも重く、目的地に着くまで30分もかかってしまいました。藤木君と宮下君も大変なようでしたが、宮下君は力があるようで、かいりと宮下君は僅か20分で到着していました。（宮下君ばかりほめて藤木君は仕事ができないみたいになっていますが、決してそんなことはありません。藤木君、ごめんなさい！）ボーイスカウトでは宮下君は何にも優れていて、安心しました。さて、次は夕飯の準備です。夕飯では祭りの時のサツマイモを使いましたが、むしや泥などがたくさんついていて、限りある水をたくさん使って落とさなければならなかったので大変でした。しかしその時に藤木君が積極的に手伝ってくれて仕事が早く終わり、藤木君大活躍でした。しかし、残念ながらご飯があまりおいしくなく、芋も硬くて最悪でした。ご飯は失敗してしまいましたが藤木君や宮下君にこのようなこともある。という事を学んでもらえたので僕たちにとってもよい学習になりました。

このキャンプを通して思ったことは、自分は寒くて夜が寝られなかったことがあったので、じかいは工夫をして夜を過ごしたいです。さらに、藤木君と宮下君は仲良くしてくれていたのだからこれからも協力してキャンプを過ごしてほしいなと思いました。学ぶことがたくさんあったので、次回も気を引き締めていきたいです。

『十二月班キャンプ』

BS 隊バイソン班 佐々木 海利

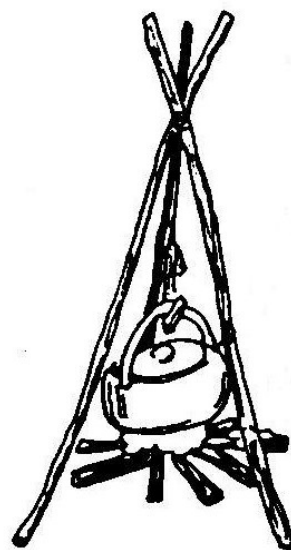
私は 今回十二月班キャンプに参加し、あらためて一級スカウトとして後輩を指導していかなければならないということを実感しました。

今回は一級は私のみで、計画や役割分担などを主導して行いました。午前に祭りの手伝いがあり、その後の行動にかなりプレがあると思われましたが、班キャンプだった事もあり、全員で時間調整などをてっていしてすることができました。

また、今回は限られたそうびでキャンプし水も自分たちでくんでくるという今までやった事のないキャンプでしたが、意外と少ないものだけでキャンプすることで、自然と工夫

をしながらせいかつをする意識ができていたので、今年度は、このようなキャンプをふやしてみようと考えています。水も自ら運ぶことで使用量を自発的に減らすことができたので、やはり意識の問題なのだと痛感しました。

新たな仲間が増えてきているので、今までつちかってきた物を後輩たちに教えていかなければならない一方、私自身も、早い内に次のステップへ上進するために着々と勉強を進めていく必要があります。一年の終わりというこの機会を利用し、もう一度自分が何をすべきかを考えていこうと思います。



町田第13団行事 スキー訓練感想文

2024年(R6)12月28日～12月30日

団行事 スキー訓練(冬の里地・里山体験教室2024・町田第1団)

湯ノ丸高原スキー場

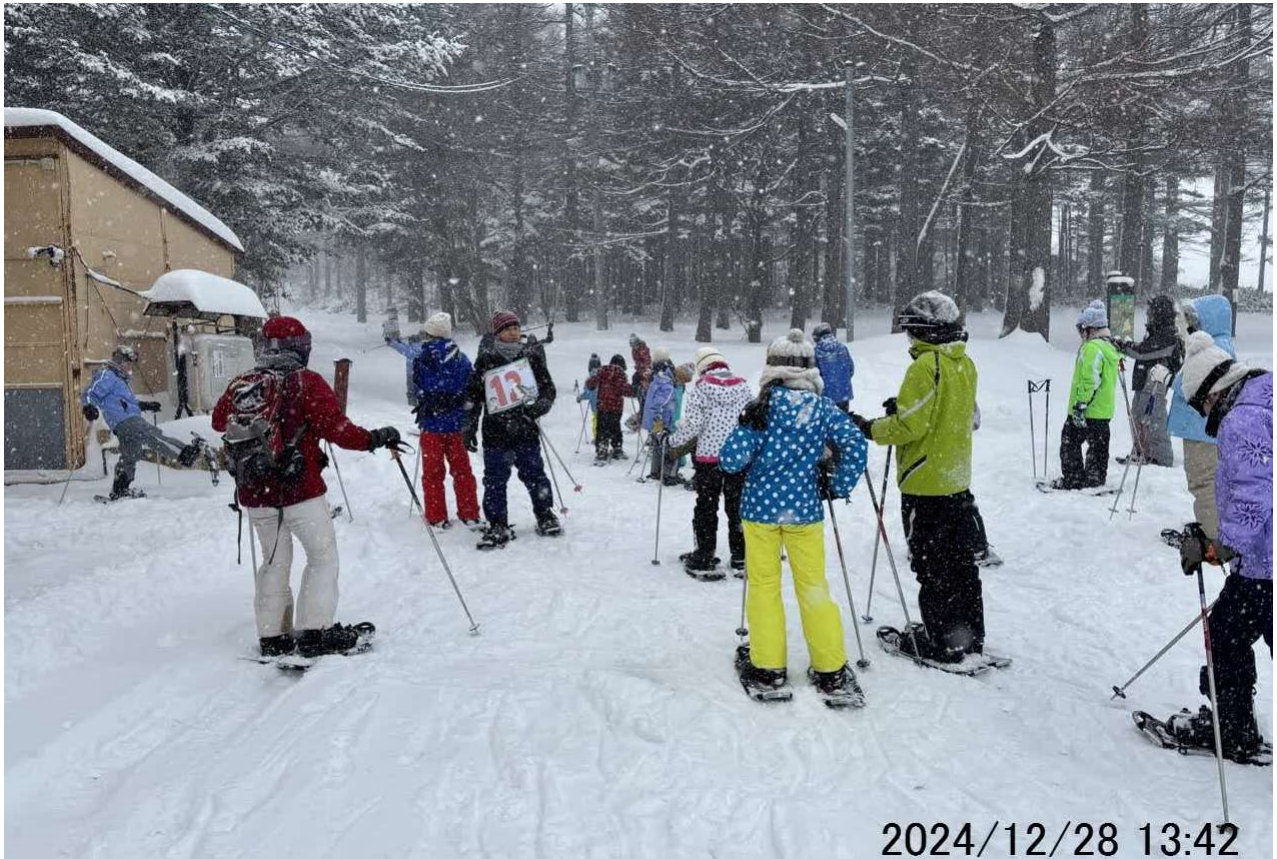


『スキー訓練』

団委員長 田地 司

スキー訓練は毎年1月の3連休に13団独自で実施していましたが、今年は1団の夢基金プログラムに参加させてもらい、12月28日から3日間、長野県の湯ノ丸高原スキー場(注1)で行いました。

初日は、バスで町田から移動し午後からスノートレッキング。雪の上をトレッキングシューズで歩きながら自然を観察するプログラムで、13団のスカウトにはほとんど初めての経験でしたが、全員がうまく雪に乗っていました。ただ、ねらった目的は雪の上を歩くという技術的なことだけではなく、歩いている時に感じる自然の感覚でしたが、残念ながら歩くことで精いっぱい、また目的地に着いたとたん雪合戦となってしまいました。その夜は、天体観測で、東京では見ることのできない夜空いっぱいの星の下、1団が用意してくれた天体望遠鏡で金星を見て楽しみました。土星の環っかは残念ながら見れませんでした。



2 日目はいよいよスキー訓練です。専門のインストラクターがコーチについてくれて、初心者から中級、上級とグループ分けして、バッジテスト 2 級を目指します。もちろん、初めてのスカウトは雪に慣れることから始まりますので、2 級は無理ですが、まずは楽しく滑ることができれば上出来です。その夜は、キャンドルサービスで、1 団、13 団のスカウトが団の垣根を越えてとても楽しい時間を過ごすことができました。1 団の「猛獣狩り」と 13 団の「猛獣狩り」をそれぞれ披露して同じゲームでも団によって解釈が違うことを感じてもらったようでした。1 団のベンチャー、ローバーがサービスを仕切って、大変うまくスカウトをのせてくれたことが印象的です。13 団からはベンチャー、ローバースカウトの参加がなかったので 1 団にお任せしたことが残念でした。

最終日、いよいよ技能認定です。インストラクターがそれぞれのグループを廻って、スカウトの技能を検定します。午前中で終了し、昼食後に検定結果発表、閉会式を行い、スキー場をあとにして、概ね時間通りの 18 時過ぎに町田に到着、解散となりました。

さすが 1 団！勝手に滑って自分が楽しむことができればいいという 13 団流のスキー訓練と違って、ボーイスカウトの訓練として、きちんと雪山の体験をスキーを通じてスカウトに感じてもらうプログラムをしっかり作り上げていることに感心すると同時に我が身を振り返ることができました。

検定結果は以下の通りです。それぞれのレベルに合わせた級にチャレンジし合格したスカウトです。（注2）

挑戦級 2級 ― 荒 旬之輔（限りなく1級）

挑戦級 3級 ― 廣石 權、桙谷 唯人

挑戦級 4級 ― 佐々木 大和、苅部 義明、苅部 義宗

挑戦級 5級 ― 中田 丞一郎、孫賢奏ニック

挑戦級 6級 ― 祁徐 楽

（注1）今年の夏キャンプの場所もこのスキー場で実施します。

夏の間は使用しないレストランを借り切ってBVS、CSはレストラン内で舎営、BS以上はゲレンデで野営の予定。

（注2）検定は、SAJ公認インストラクターによる検定結果で、公認結果ではありません。



『スキー合宿』

BS 隊バイソン班 廣石 權

今回のスキー合宿は従来の自分たちで自由に滑るものではなく、講師の方々にお教えてもらうという所が新しく、自分たちのスキー技術の強化につながったと感じました。具体的には、ボーゲンからパラレルの移行の仕方など自由に滑るだけではわからないようなことを教えてくれました。他にも、今回は一団との合同でもあったので、お互いに交流をさらに深めることができました。今回はビーバーやカブを楽しませる出し物みたいなものを全て一団さんに任せてしまっていたので、次交流する機会があれば、自分たちも力になりたいです。

今回は講師の方々に教えてもらう形だったので、次の合宿では講師の方々に教えてもらったことを自分たちで生かす活動をしてみたいです。今回三級まで取ることが出来たので、次は二級が取れるレベルまでスキーを上達させたいです。

『雪山物語』

～俳句紀行文～

BS 隊バイソン班 荒 旬之輔

今回のスキー訓練は、町田一団と合同で行った。まだあまり関わりがない団であったが同じ町田地区として頑張ろうと思った。ボーイ隊は三人だけで少し心配なところもあった

が少人数でも楽しめたと思う。スキー場は「湯の丸スキー場」という場所で、行ったことはなかったが、雪質がとても良く、気持ちよく滑ることができた。

実は、冬休みの宿題が大量に出ており前日もスキー訓練初日も、頭の中は学校の宿題でいっぱいだった。今思えば混乱しながらもよくスキー訓練に行くことができ、宿題が間に合ったと思う。とは言っても、バスの中でもひたすら考え廣石君にも聞きながら、スキー訓練の空き時間などを使って宿題をやっていた。行きのバスで一つよかったことは、多少車酔いはあったものの、去年よりは酔わなかったことだ。おそらくバスの景色を見る余裕もなく、宿題に集中していたからだろう。

初日はスノーシューの企画があり、僕はやったことがなかったが新しい経験ができてよかったと思う。1 団と 13 団のカブやビーバーは元気に雪で遊んでいたが僕はよく疲れずに遊べるなと思い、ゴールについたらすぐさま雪の上に寝転んだ。ここで一句。

「晴天に 雪が散りゆく 子らの声」

本当に寝てしまいそうだった。ずっとこのままで宿題のことなんか忘れて... と思ったけれどそうはいかない。だんだん顔に雪が積もっていき、寒くなってきた。しかし、ずっと寝ているとストレスが発散されるような気がして数分間そこで寝ていた。

スノーシューで歩いてみて足を動かすのにとっても苦労したが、これなら安全に歩けそうだった。とても良い経験になり改めて雪の楽しさを味わったが、僕はスキーで滑る方が好きだと思った。

今回のスキーはスキースクールに参加したので、普段聞けないことなどを聞いて去年よりもとても上達した。最初に滑った時は去年の感覚をすっかり忘れていて、思い出した時は自分の中で納得がいった。自由滑走の時間がほとんどなかったので今度はもっと自由に滑りたいと思ったが、唯一の自由滑走の時は爽快な気分だった。ここでまた一句。

「雪山を 風と競り合う 矢のごとく」

去年よりかは確実にうまくなっていて、自分でも驚いたが新しい感覚をつかめたのでこれからもうまく滑れるように工夫したい。検定は 2 級に合格したが、「1 級に近い 2 級」と言われた。「もう 1 級でいいんじゃないのか」と僕は思ったが、僕は右回りのターンの時に右足を揃えるのが苦手なので両足をもっと綺麗に揃えて、次は「絶対 1 級を取ってやる」と思った。家族でいった時に一般の検定の方で 2 級を取る計画をしているので、それに向けて今まで以上に頑張りたい。

次回、僕はスキーの自由滑走の時間をもっと増やして欲しいと思う。また二つの団が合同で活動する機会があれば積極的に交流したいし、協力していきたいと思う。最後に団委員長をはじめ、リーダー方は時間のないなかスキーに来てくれたので感謝したい。





『スキーキャンプ作文』

BS 隊バイソン班 佐々木 大和

今年度のスキーキャンプでは、いくつか見直すべき点がありました。

まず一つ目は、荷物の管理です。スキーキャンプではゴーグルや手袋、ネックウォーマーなど、様々な小物をしっかり管理する必要があります。しかし、僕はヒーターの前に置きっぱなしにしたり、棚に無造作に放り投げたりしてしまい、ネックウォーマーをなくしかける失敗をしてしまいました。ボーイスカウトでは、スキーキャンプに限らず多くの小物を管理する場面があるので、今回の反省を活かして、整理整頓の意識を高めたいと思います。



次に、体調管理の大切さについてです。今回のキャンプでは、一緒に参加する予定だった二つ上の兄がインフルエンザにかかり、残念ながら行けなくなりました。その状況を知っていたにもかかわらず、僕自身も体調管理が甘く、しっかり防寒をしなかったり、手洗い・うがいを怠ったりしてしまい、結果的に軽い風邪を引いてしまいました。そのせいで、キャンプ中も思い切り楽しむことができず、周囲にも心配をかけてしまいました。この経験から、自分の行動を見直す必要があると深く感じました。次回のキャンプでは、兄が病気になったときの教訓

を活かし、出発前から体調管理を徹底し、キャンプ中も基本的な健康習慣を守ることを心がけたいと思います。

また、今回のスキーキャンプでは他の団体と一緒に活動する場面もありました。他の団の中にはふざけている人たちもいて、その様子を見て少しがっかりしました。しかし、その中でも真面目に取り組んでいる人たちがいて、そういった人たちはしっかりと評価さ

れ、賞を取る姿を見て「やはり努力は報われる」ということを感じました。ふざけた行動を反面教師として学び、僕自身もさらに真剣に取り組む大切さを学びました。

そして、思い出に残った出来事についてです。スキー訓練で教えてくださった先生はとても優しく、説明もわかりやすかったので、安心して取り組むことができました。僕は過去に一度スキーを経験したことがあります。今回のキャンプではさらに滑り方が上達したと感じました。また、宿泊中に暖房の影響で喉が乾燥してしまったのも印象的でした。この経験から、快適に過ごすためには機械に頼りすぎず、例えば喉が乾燥しないようにマスクを着用したり、水分補給をこまめに行うことが大切だと気づきました。次回はこうした対策を事前に準備しておきたいと思います。

スキーキャンプは楽しいだけでなく、自分の課題や改善点に気づける貴重な機会でした。この経験を次の活動に活かしていきたいです。



『冬の里地・里山体験教室に参加して』

BS 隊副長 今田 智治

今回は普段のスキー訓練とは異なり町田第1団が主催の冬の里地・里山体験教室に参加しました。今回は単にスキーをするだけでなく、スノートレッキング体験をしたこと、スキーのインストラクターから指導を受けかつ検定を受けたことが大きな違いでした。

今回長野県の湯ノ丸高原スキー場が会場となっていましたが、非常に雪質がよく、また期間中は天気にも恵まれ、活動には最適な環境であったと思います。

スノートレッキングは私自身も初めての体験でしたが、スノーシューを装着しての歩行に普段の歩行やスキーとも異なり少々苦戦しました。しかし足が埋もれることなく移動するのは、雪の中での散策を楽しむ余裕が生まれるため、スキーとは異なる雪上の楽しみ方を体験できました。

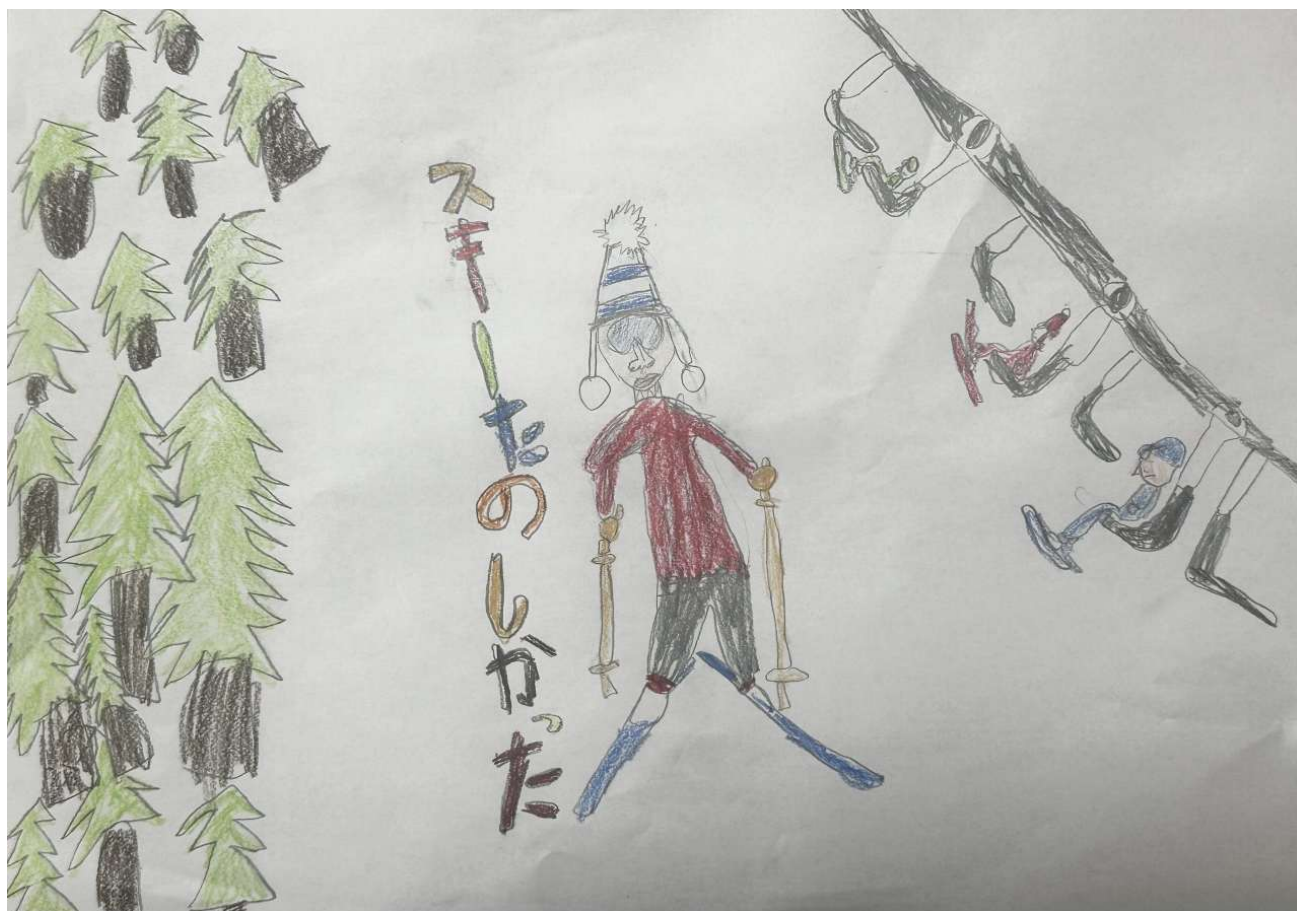
スキー教室ではスカウトたちはそれぞれの技能に応じて班分けを行い、インストラクターの方から指導を受けました。個々人のレベルに応じた技術的な指導を受けることができたことは特にある程度滑ることのできるスカウトにとっては、滑りの質を向上させるためにも良い経験になったのではないかと思います。また最後に行われた検定も自身の技能の向上を実感できるだけでなく、今後の目標にもなることから、スカウトたちの励みになると感じました。

今回の活動で一番印象的だったのは、最初は距離のあった両団のスカウトたちが徐々に打ち解けていく様子でした。今後も合同の活動を通じてスカウトたちが交流を重ね、お互いにより刺激を与えあえるような関係を築けてもらえればと思います。



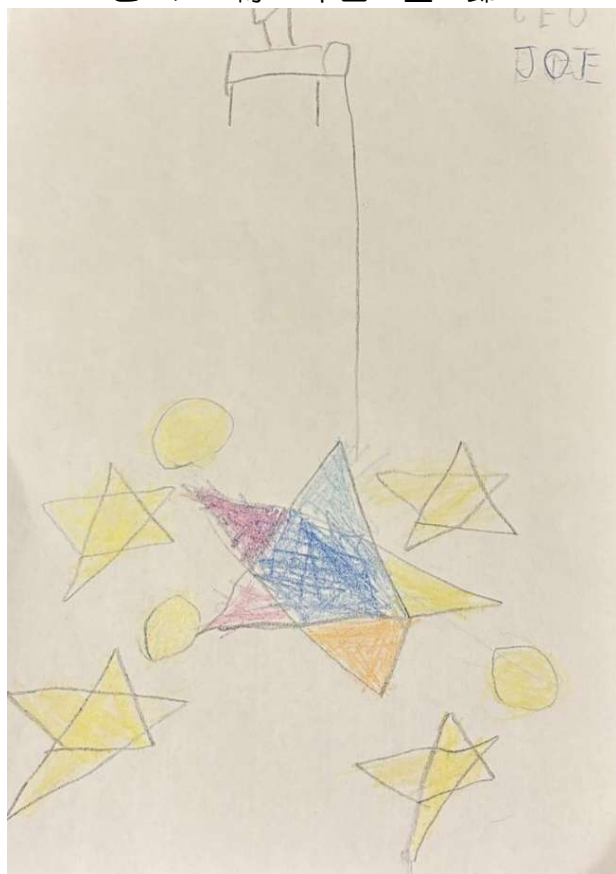
『いっばいすべったよ』

ビーバー隊 刈部 義明



『望遠鏡での星空観察』

ビーバー隊 中田 丞一郎



2025年（R7）1月11日～13日 VS 隊 降雪期キャンプ ハケ岳



『ベンチャー隊だより ～雪山の美しさ～』

ベンチャー隊隊長 永山 雅人

2023年冬、はじめての積雪期キャンプをベンチャー隊として行いました。1回目ということでまずは環境になれることに主眼を置き、ピークへは行きませんでした。

2025年、団として2回目となる積雪期キャンプにおいては、スカウトの技量、天候などの条件が揃えばピークを目指すこととしました。

1日目

今年は、冬型の天候となり、十分な積雪があり、駅からタクシーに乗り、登山口で降りたところから雪がある状態でした。登山口からテント場まで4時間強、雪の樹林帯でチェーンスパイクを履いて歩くことで、雪道の歩行訓練を行うことができました。

快晴の空の下、風も無く、キンとした空気の中、この環境でしか見ることができない自然の景色を見ながら歩くことは、荷物は確かに軽くは無いのですが、それを忘れさせてくれるほど美しかった。

夜の段階で天気予報を確認したところ、天候には問題が無いということ、そして、スカウトは歩行技術に問題なく、体調も問題ないということで、明日は、硫黄岳（2760m）のピークを目指すことを決定しました。

決定に際し、今回のキャンプに同行いただいた長谷川リーダー、今田リーダーのサポートをいただけたのも大変ありがたかった。

2日目

朝、出発後2時間半で頂上に到着することができました。

登り始めて2/3程度までは、木々の間にある登山道を登るため景色も見えず、ひたすら雪の斜面を登り続けます。やがて、森林限界を超えた辺りから一気にハケ岳連峰が姿を見せ、朝日の中の赤岳や阿弥陀岳を見ながら登っていくのは、これまでの疲れを吹き飛ばし

てくれました。興奮しながら登っていくと、眼の前がさらに開けて、これまで見えなかった山の反対側の景色が眼の前に広がります。

諏訪湖や北アルプスまでもが見える場所に到達し、最終ゴールである硫黄岳も目に入るようになります。一面が雪に覆われ、青と白のコントラストの中に硫黄岳がそびえています。

この時点でさらに興奮度があがります。

そこから 20 分程度、やや岩のある場所を登っていくと、再び緩やかな平面が現れ、ついに硫黄岳の山頂に到着です。山頂は平で広く、視界を遮るものが何もなく、360 度景色を見ることができます。

興奮度もマックスです。

写真を BAND などに上げましたが、実際はこの写真の何倍も美しいです。

なぜ写真以上に美しいのか？

あの場に行くには、自分の脚で行くしかなく、その努力が実を結んで頂上に立った時の達成感があるからだと思う。また、空気や風、気温、音など、日常生活では絶対に見たり感じたりすることのできない厳しい空間の中にいる自分を実感することで、目の前に広がる景色が一層素晴らしいものだと感じさせるのではないかと思います。

硫黄岳の頂上は、風も少しあり、体感的にはマイナス 30 度近くあったと思われ、寒さも感じましたがそれを超える興奮や充実感、幸福感が自分を包み込みました。

その日の夜にテント内で聞いた感想でも、スカウト全員が「また来たい」と言ってくれたのは、私にとって非常に嬉しい瞬間でした。

雪山というと、吹雪や凍傷、雪崩など危険なイメージが強いのではないかと思います。実際に行ってみると、そのイメージは大きく変わりました。私自身も学生の頃、初めて雪山に行く際には期待と同時に恐怖心を抱いていました。しかし、実際に体験してみると、その美しさや達成感が恐怖を上回るものでした。

自分自身は、今でも素晴らしい体験として、記憶に深く刻まれている出来事でしたので、スカウト達と活動を始めてから、いつかはスカウト達と一緒に行けたらと思っていました。

今回のキャンプは、スカウトたちにとっても一生の思い出となる経験になったことを願っています。雪山の厳しさや美しさを共に体験することで、彼らの心に深く刻まれることを期待しています。活動を通じて、自然の素晴らしさや仲間との絆を感じてもらえたら、これ以上の喜びはありません。

今後も、スカウトたちと共に新たな挑戦を続けていきたいと思っています。次回の積雪期キャンプでは、さらに多くのことを学び、成長できる機会を持てることを楽しみにしています。

す。自然の中での経験は、私たちにとってかけがえのない宝物です。これからも、仲間と共にその宝物を増やしていきたいと思います。

追伸、

今回ハケ岳を積雪期キャンプの場所として選んだわけですが、その理由は以下の通りです。これだけの好条件が揃っている場所を私はここ以外知りません。

- ハケ岳は太平洋側にあります。従って冬型の気圧配置になれば、晴天率が高い。
- それを裏付ける事実の一つは、近くに野辺山宇宙電波観測所があることです。
- 雪雲は、北アルプス、南アルプスなどの山でブロックされるため、冬型の気圧配置になるとハケ岳は天気が安定して吹雪になるようなケースは少ない。
- 晴天率が高いのに程よい量の積雪がある。
- キャンプ道具や食料を背負って歩く登山口からキャンプ場までは、2/3は林道、残りは樹林帯であり、安全な道が続き、半日かからずに到着できる。
- キャンプ場から頂上まではデイパックで行ける。
- キャンプ場から頂上まで3時間かからずに行ける。
- キャンプ場は雪崩の危険がない。
- 硫黄岳までは、急斜面、鎖場、ハシゴ、雪面をトラバース（横切る）などのリスクのある場所がない。
- 荒天になった場合は、十分な人数が宿泊できる山小屋がある。



『白銀の世界に吸い込まれて』

町田第13団 VS 隊 宮澤 陸人

1月11日。美濃戸口から赤岳鉱泉に向かった私は、あっという間に白銀の世界へ吸い込まれ、自然の雄大さを知ることとなった。一面真っ白な雪。それは忙しい生活を続けていた私の疲れを吹き飛ばし、いつしか心躍らせる楽園へと私を誘った。

さて、雪の情景を詠んだ和歌にこういったものがある。

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

意味は、「雪が降って、木に白い花が咲いたように見える。木毎（きごと）と書くと梅という字になるが、どの木を本当の梅の木と区別して折ったらよいだろうか」というものだ。私はこの歌を見たとき、少し疑問に思った点がある。それは、「なぜ昔を生きた人は、木に降った雪と白梅を見違える可能性のあるほど、木に降った雪を美しいと思ったのか」と言うことである。だが、このキャンプを経てこの疑問に終止符が打たれたように思う。私が今まで見てきた雪は人の手が入ったある意味“人工的な雪景色”だったのだ。しかし、今回私が見たのは手つかずのままの、すなわち“ありのままの雪景色”である。今回見た雪景色はまさしく昔の人も見ていた雪景色であり、それがどれほど美しかったかを私はこのキャンプで身をもって体感することができた。何もかもが凍て尽くされた空間。時折、風が吹いてハラハラと雪が舞い落ち陽の光に照らされてダイヤモンドのような輝きを放つ雪。そんな雪はとても幻想的であり、美しいものだったと思った。

このキャンプでは、雪の本当の美しさを知ることができたと同時に、雪の脅威も思い知った。今回のキャンプで一番苦労した点、それは、「圧倒的な寒さ」だった。防寒着やシュラフをもってしても、極寒の雪山の中ではあまり効力を発揮しなかった。効力を十分に発揮したのはカイロで、登山シューズの中にミニカイロを入れたり、貼ることのできるカイロを防寒着のポケットに入れることで寒さをしのぐことができたと同時に、登山時に発汗してきたときのカイロの着脱のしやすさも魅力的だった。過去のキャンプでは感じ得なかった寒さ、そして今回のキャンプにおける防寒対策は今後のボーイスカウト活動の良い経験になると同時に、次回以降の寒さが想定されるキャンプに活かすことのできる有意義な機会になったと感じた。

しかし、雪中キャンプならではの魅力も数多くあった。まずは食材。雪山はまさに「天然の冷凍庫」である。そのため、普段は衛生上の観点から食べることのできない生の肉を持っていくことが出来た。そのため、私たちの作った鍋料理が、普段より格段においしさが増した。また、テント設営では、あらかじめ江ノ島にて行った予行演習通りにテントを立て、ペグが刺さりにくい場所ではビニール袋に雪を詰めてその袋を雪の中に入れてペグの代替品とするなど、細かいながらも雪山での恩恵を感じることができたように思う。

今回私は初めて雪山でのキャンプを行った。「初めて」ということもあり、先輩方やリーダー方のご協力や助言にも助けられつつキャンプをしてきたが、次回からは、今回の経験も踏まえ、スカウト同士で議論を重ねて雪中キャンプに臨めたら良いと考えている。次、

雪山に登ったときには、今回私たちの眼前に広がっていた景色とは違う景色が広がっていることだろう。雪化粧をしている雪山も美しかった。次回、雪中キャンプで私たちが会える景色はどのようなものなのだろうか。来年度もぜひ雪山に足を運び、美しい景観を楽しみたい。

『極寒雪中キャンプ体験記』

VS 隊 佐々木 永遠

1/11 から 1/13 にかけてハケ岳で雪中キャンプを行った。雪山でのキャンプは今回が初めてで、約-20℃の世界での生活や登山を経験した。

この三日間で特に印象に残った体験を紹介する。

最初にあげるべきことは初めての雪山での登山だ。1 日目の美濃戸口から赤岳鉱泉までの登山や二日目の硫黄岳登山では雪が積もっていたのでチェンスパイクを使用して登山した。最初は雪の上で歩くことに苦戦をしていたがチェンスパイクの使い方を教えてもらい、慣れてからはスムーズに登ることができた。

1 日目の登山は荷物に足を取られ、体温の調節もうまく効かなく暑苦しかったのが過酷だった。2 日目、硫黄岳への道中で見た景色は圧巻だった。樹氷に覆われた道と雪に覆われた銀世界がとても印象的だった。1 日目では見る余裕もなかった景色が2 日目では雪山ならではの景色に気付くことができた。目標の硫黄岳山頂に到着した時の達成感は、今までの登山とは一味違う特別なものだった。しかし、山頂では登山中よりもはるかに気温が低く冷たい風が吹きつけていた。そのため 登頂の達成感よりも早く下山したいという気持ち勝ちが勝っていた。下山が終わる頃には雪が降っており、山頂で見た晴々とした景色は奇跡だったのかもしれない。

今回のキャンプ中での大きな楽しみは食事だった。夜ご飯では 1 日目はキムチ鍋、2 日目はトマト鍋を作った。登山後の疲労と寒さで冷え切った体に熱々の鍋がとても染み渡った。量が少し多かったが、それでも食欲が勝ち、味のうどんまでしっかり食べたほどに美味しかった。また、2 日目の昼には赤岳鉱泉で昼食をいただいた。赤岳鉱泉はログハウスのような建物をしており、温度も雰囲気も暖かい小屋だった。それぞれ、ラーメンや牛丼、カレーなど好きなものを食べた。私はカレーをいただいたがちょうど良い辛さでとても美味しかった。

耐寒キャンプの延長線上とも言える雪中キャンプは何よりも寒さと雪が最大の試練だった。耐寒キャンプとは気温が段違いなので防寒対策はより一層強化しなければならなかった。1 日目にキャンプサイトに着いたときは靴下を濡らしてしまい足先が冷えて痛くなってしまった。カイロを使ってなんとか動くようになったがそれまでの間テントを立ててくれたスカウトたちには迷惑をかけてしまったなと感じている。今後、雪山や低温の場所に行く際には、防寒装備を考慮していこうと思う。寝る時はテントの中でも冷気が入り込

み、寝袋にくるまっても当然全身が冷えていた。カイロを寝袋の中に入れたりなるべく肌を空気に触れさせないようにと工夫をした。登山中に雪が積もっていたのでチェーンスパイク無しでは登るのが難しかったが、チェーンスパイクを使うことで上手に登ることができた。また、雪中キャンプ模擬訓練の時に行ったテントを貼る際にペグを刺す方法として雪を使うものもあった。実際にプラスチックのペグでは刺すことができない箇所があったので、ビニール袋に雪を詰め、それを雪の中に埋めてテントを固定した。事前に学んだことが実際に役立った瞬間だと感じた。

何より命の危険性が伴うようなキャンプだったにもかかわらず、全員が無事に帰って来れたことが一番良かったと思う。硫黄岳の登山もお互いに声を掛け合いながら全員で登頂し、全員で帰ってきた。また、重い荷物を分け合うなど、過酷な環境だからこそ普段以上に仲間の存在が心強く感じられた。今回のキャンプを通して厳しい環境でも様々なことにチャレンジし適応する能力が身についた。この経験を活かし活動の幅をさらに広くし、様々なことに挑戦してみたい。

極寒での雪中キャンプは天気にも恵まれ、大きな事故もなく無事に終わることができた。雪山での生活や登山を通して仲間との協力の大切さを改めて感じた。 -20°C という過酷な環境の中で出会った景色や、仲間と囲んだ食事など、過ごした時間は間違いなく一生忘れられないものとなるだろう。



『雪山で得られたこと』

VS 隊 木下 誠

去年に引き続き今年も、私はハヶ岳の雪山登山を行いました。とは言っても前回とは違ってスカウトは私だけではなく、高 1 のスカウト 3 人もいて、雪山登山をしたいと言ったのも彼らでした。この文では去年の雪山登山と違ったこと、去年の経験をどう活かしたか、この登山で学んだことは何かについて書いていこうと思います。

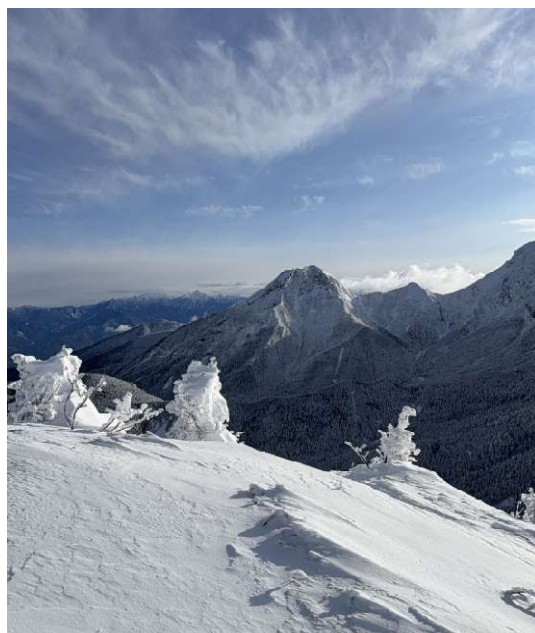
・まず、計画書の作成の時点で去年と違う点がありました。それは去年よりも改良、訂正を増やしたということです。まず、計画書のテンプレートは宮澤に作成してもらいました。宮澤は計画書、報告書を作成するのが得意なようで、最初に作成した時点で私よりも分かりやすく、丁寧に書かれた計画書で、レイアウトなどは特に参考にしたいと思いました。ただ、それで宮澤に任せっきりになってしまったのが良くありませんでした。リーダーにそのことを指摘され、計画書を良く読んで改善箇所や矛盾を探し、みんなで計画書をより良いものに仕上げようと思いました。特に私は去年の経験を活かし、個人装備で持っていったほうが良いものの提案や、去年の結果から時間が厳しいと予想される行動予定の改善を行いました。この時点で計画書には去年よりもかなり力を入れていました。しかし話はあまりまとまらず、本番直前にも持ち物分担の矛盾点、記入忘れ、メンバー同士の認識の違いがありました。なぜこんなことが起こってしまったのか、それは去年に比べての参加スカウト、リーダーの増加が原因だと思いました。去年は 3 人、今年は 7 人で、人数が倍以上に増えました。そのため、荷物分担の複雑化や全員が集まれる機会の減少、全員の認識を一致させる計画書を作成する必要などが出てきました。ここで去年、リーダーに言われていた、「誰が見ても理解できる計画書を作れ」ということの重要性が理解でき、スカウトが自分だけではないことのメリットにも気づくことができました。

・1 日目と 2 日目の行程に行者小屋までの歩行訓練、滑落防止訓練の予定があり、高 1 スカウトはここで 2 日目に向けた歩行訓練をする予定でした。ですが、本番は時間の都合上、行者小屋まで行くことができませんでした。時間が押してしまったことの理由にテント設営のための土台作りに予定よりも時間がかかってしまったことがありました。雪が思ったよりも固まりづらく、テント場の混雑で立地もあまり良くない場所になってしまったことが原因です。これは雪が少なく人も少なかったという、去年経験していなかったことが原因なので、多少は仕方ないと思いました。ですがもう一つの理由として、積雪、同行人数の増加による赤岳鉱泉への到着の遅れがありました。こちらは十分に予測可能だったと思いました。夏や去年の冬のハヶ岳と同じ時程で予定を立ててしまい、積雪の多い今年のハヶ岳では、去年と同じ時間では赤岳鉱泉まで到達不可能でした。これは私が計画書を作成する時点で予測し、到着時刻を変更するべきだったと後悔しています。三日目の時程を変更した際は当日もほぼ予定通りの時間で行動できたため、メンバーや環境が変わった際は特に登りの時間に余裕を持つべきだと改めて感じました。

・2日目の今回のメイン、硫黄岳への登頂はかなりスムーズに、トラブルも無く行うことができました。7人全員で行動することによって、いざという時にすぐにトラブルに気づき、全員で協力できるという安心感があり、精神面でもメリットがありました。赤岩の頭、硫黄岳から見る景色は今までに見たことがないほど美しく、晴れていました。あとから写真を見返してみても、我ながらよくこんな景色を眺めることができたな、と思いました。今回雪山登山に参加して本当に良かったと思った瞬間でした。この成功体験は、今後の人生に経験として残せる、とても有意義なものでした。

食事の際、トラブルが2つありました。1つ目が2日目の朝、一酸化炭素検知器を水に落としてしまったことです。幸い、乾かして直すことができましたが、不注意が原因だったため、反省して改善すべきでした。その夜、リーダーからもそのことについて話があり、危険予測が大事だと言われ、以降は一層リスクを理解し、トラブルを未然に防ぐことができました。2つ目が、バーナーのガソリンが切れてしまったことです。去年は3人だったため、ガソリンもカートリッジ1個分で足りましたが、人数が増えた分、燃料も増やさべきでした。こちらはリーダーが予備でガスバーナーを持っていたおかげで対処できました。沸かさないといけない鍋の量が増えた分、燃料も増やさないといけないことを予測するべきだったというのが反省点です。

寒さ対策はバッチリでした。去年の経験があったからこそ、防寒対策用の持ち物を見直して、その経験を他のスカウトにも共有し、夜も暖かく眠ることができました。リーダーからPDCAサイクルの話がありましたが、こちらは去年しっかりDo、Checkができたからこそ、今回Actionにつなげることができたのだと思います。今後も機会があれば雪山登山をしてみたいと考えているので、PDCAを意識して、そして今回の経験を周りに共有して、よりクオリティの高い山行にできると良いと考えています。今回の反省点は主に計画書にありましたが、人数が増えると、より計画書に力を入れ、誰が見ても理解できる計画書を作ることが重要だと学びました。去年の雪山登山の反省を活かし、改善することができ、さらに別の改善点も見つけることができる、非常に有意義な山行となりました。





『雪中キャンプに参加して』

BS 隊副長 今田 智治

今回ベンチャー隊の活動に参加をさせてもらい、雪山でとても貴重な、そして思い出深い経験をさせてもらいました。

登山口から野営地である赤岳鉱泉まではチェーンスパイクの感覚に戸惑いつつ、普段とは異なる雪と氷に包まれた山の景色に目を奪われながら、比較的広くなだらかな山道を移動しました。

赤岳鉱泉から硫黄岳へは、前日とは異なり木々の間の狭い、本格的な登山道といった中を進んでいきました。幸い天候には恵まれたものの、はじめのうちは木々に視界を遮られ、薄暗い雪道を進みましたが、徐々に木々が少なくなり、突き抜けるような青空のもとに出ました。そこには青空のもとに悠然と白い山々がそびえ、それまで写真の中でしか見たことのないような、思わず息を呑む景色が眼前に広がっていました。まるで空を目指して進んでいくような感覚で硫黄岳山頂を目指し、参加者全員が無事に登頂。下山後にはスカウトたちも、また来たいと口にしており、良い経験をさせてあげられたと思うと同時に、同じ感覚を共有できて非常にうれしく思いました。

今回の活動を通じて思ったことは、ベンチャー隊のスカウト達の活動を、下の年代のスカウトたちに見せて、君たちもこんなにすごいことができるようになるんだと伝えたいということです。そのためにも上下の交流の場をもっと持たせてあげられたらと強く感じました。



『雪山登山』

CS 隊副長 長谷川 政弘

みなさんは『雪山登山』と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。

吹雪 雪崩 遭難 凍死 危険

このような言葉が真っ先に思い浮かびます。雪山登山は体力モリモリで経験も豊富なプロ級の方が行うものであって、私のような素人には無縁だと思っていました。

それがどうでしょう、冬のハヶ岳に登ってしまったのです。

それなりのトレーニングをしたわけでもなく、当然スキルも持ち合わせていません。ではなぜ登れたのでしょうか。

1. 永山隊長の存在

永山隊長は学生時代にハヶ岳での雪山登山を経験されていて、条件が整えば安全に登山できることをご存知でした。必要な装備のアドバイスもたいへん助かりました。永山隊長にお誘いいただかなかっただら、絶対に参加しませんでした。

2. 今田副長の存在

今田副長はRS100km ハイイク完歩率 100%、体力も気力も兼ね備えた、“さすが富士スカウト”と呼べる存在です。最近では、登山指導者の資格も取られたそうです。今回も誰よりも思いザックを担ぎ、パーティーを導いてくださりました。

3. ベンチャースカウトの存在

今回参加した4名のスカウトはみな朗らかで、極寒の中でもワイワイと楽しそうにされていて、辛い状況を和ませてくれました。永山隊長のご指導のもと、計画書作りに励む姿は、私が知るCS時代のものとは全く違うもので、改めて彼らの成長を見た思いです。今回の登山の成功は、間違いなく彼らの存在でした。

上記に加え、天候に恵まれたこともあり、生きて帰ってくることができました。というより、危険な思いは全くありませんでした。永山隊長が仰る“ハヶ岳は安全な雪山”の意味を肌で感じました。

硫黄岳に向け赤岳鉱泉から登り、赤岩の頭手前で樹林帯を抜け、赤岳をはじめとするハヶ岳の主稜たちがほぼ360°に見えた際は、腹の底から沸き上がる唸りを押さえられませんでした。あの感動はこの時期にここへ登った者にしか味わえないものだ実感しました。このような経験をできたこと、本当にみなさんに感謝します。

RS 隊 卒団を迎えて

『17 年と半年間、ありがとうございました！』

ローバー隊 井上 雄太

早速ですが皆様、「2025 年問題」という言葉をご存じですか。少子高齢化による人口構造の変化や、設備の老朽化など、2025 年に起こる日本社会のさまざまな課題を指す言葉なのですが、その中に、「ビデオテープ（VHS）の経年劣化によるデータ消失問題」というものがあります。

私は最近大学の講義で知り、急いで家にある自分の成長が録画されたテープをデジタルデータ化することにしました。また、これまで井上宅で撮りためられてきた写真データも同時に整理しました。

テープや写真を整理する中で特に目に付いたのは、膨大な量のボーイスカウト関連のデータでした。考えてみれば、2025 年の 3 月で、ボーイスカウトには 17 年と半年間在籍したこととなります。自分の人生の中で、これだけ長く続けてきたものはありません。また 23 歳の自分にとって 17 年という期間は人生の 7 割以上を占めます。

写真・映像データは、初々しい気持ちで臨んだビーバー隊の入隊式から始まり、今は辞めてしまった同期との思い出、主演・脚本・演出を自分で行いながら、みんなと楽しく演じたキャンプやクリスマス会のスタンツ、盛岡から来てくれた新たな同期（米澤君）との出会いなどなど…本当に様々なものがありました。画面の奥で生き生きと活動している、当時の自分や仲間たちを見て、とても懐かしい気持ちになったことは言うまでもありません。

一方で、ここまでの期間、スカウト活動が続けるのには苦悩を感じたことも思い出しました。厳しい先輩との接し方や、組長・班長としてのあるべき姿、他の予定との調整など、当時、非常に悩んだ思い出があります。しかも、多い時には 9 人いた同期が、気づけば私 1 人になってしまったときには、大変寂しさを覚えました。しかし今では、これら苦悩を乗り越えてきたからこそ、自分は大きく成長出来たのだと感じています。

これまでの自分を作り上げてくれたボーイスカウトの指導者や仲間たちへの感謝の念に堪えません。ひとりっ子の私にとって、先輩や後輩たちは大切な兄弟のようなものでした。また、指導者の皆様の存在は、私にとって父親がたくさんいるようなもので、それぞれから多くの価値観を学ぶことができました。そして、支援いただいたお母様方には頭が上がりません。

17 年+半年間という期間、本当にありがとうございました。

これから私は社会人になります。今後、皆様とお会いできる機会も少なくなるかもしれません。最後になりますが、後輩の皆さん、ボーイスカウト町田 13 団で貴重な経験をたくさんして、たくましく育ってください！

『卒団を迎えて』

ローバー隊 山田 航平

皆さん、ご無沙汰しています。RS 隊の山田です。この度、約 20 年間続けてきたボーイスカウト活動を卒団することになりました。幼稚園の頃にスカウトの一員となり、気づけば人生の半分以上をこの活動とともに歩んできました。ボーイスカウトとして過ごした時間を振り返ると、数え切れないほどの思い出が蘇ります。最初はただ楽しく遊ぶことが目的だった活動も、次第に「仲間と協力することの大切さ」「自分の力で考えて行動することの重要性」を学ぶ場へと変わっていきました。特に、キャンプでの舎営やテント泊、仲間と挑んだ登山やアウトドア、奉仕活動を通じて、感謝される喜びや社会とのつながりを感じることができた事——そのすべてが、現在の私を形作る大切な糧となりました。

一方で、ここ数年は活動に積極的に参加することが難しくなり、心残りもありました。しかし、その期間もスカウトで培った考え方や姿勢は日常の中で生き続けており、「スカウトであること」は活動の有無にかかわらず、自分の中にあるものなのだと気づくことができ、またこれからの人生の指針となると確信しています。

長い間ご指導くださった指導者の皆さま、支えてくれた家族、共に学び、笑い合ったスカウトの仲間たちに、心から感謝申し上げます。

また、ビーバー時代から共に活動し、切磋琢磨してきた同期である永山、中山、岡部、井河、岡井たちにこの場を借りて心から感謝します。楽しい時も大変な時も、支え合いながら乗り越えてきた経験は、何にも代えがたい宝物です。皆と過ごした日々があったからこそ、ここまで成長することができました。これからもそれぞれの道で頑張っていきたいと思います。

これからは直接活動に参加することはなくなりますが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



2010 年 9 月 23 日入隊上進式

2025年（R7）3月1日

Last Message from B-P を読んで BS スカウトの感想

※ 巻末に『B-P ラストメッセージ』をスカウトハンドブックから転載しました

『ベーデン・パウエル ラストメッセージの感想文』

BS 隊バイソン班 荒 旬之輔

ベーデン・パウエルのラストメッセージを最初に読んだ時、僕はすぐに理解ができなかった。なぜなら一見すると小学生向けに書かれたシンプルな言葉を使った、とても優しい文章のように思えるからだ。しかし、この文章には絶対に深い意味があるに違いないと思う。また、このメッセージは僕たちスカウトへの指示やアドバイスのようなもので、自分の人生の感想などはあまり書かれていないことに驚いた。だが、ここからわかることはベーデン・パウエルはいつもスカウトたちのことを考え、どのようなことをしたら幸福な人生になるかを考えていたことだ。ここでも、ベーデン・パウエルがどのような人物かがわかる。

僕がラストメッセージを読んで、一番印象に残っている言葉は、「幸福を得るほんとうの道は、他の人を幸福にすることにある。」という言葉だ。自分もそうかもしれないが、普通の人なら幸福を得るために自分が嬉しいことや楽しくなることを求めると思う。しかし、僕はベーデン・パウエルのこの考え方にとっても驚き、僕自身も考え方を変えられた。物事を違う視点から見たり、考えたりすることは大切だと思い、改めてすごい人だと思った。

ラストメッセージに書いてあるアドバイスなどを、いつもスカウト活動の時に実践して、ベーデン・パウエルのような人になりたいと思った。さらにこの機会を通して誓いや掟の意味や目的なども改めて理解したため、これからのスカウト活動で誓いと掟を常に意識しながら活動しようと思った。



『ラストメッセージ 作文』

BS 隊バイソン班 廣石 權

僕はこれを読み、これはベーデン・パウエルがボーイスカウト活動を通じ伝えたいことの全てだと感じた。ラストメッセージでは、幸福という単語が多く、そしてその幸福は社会に奉仕することによって得られると書いてある。これは非常に重要な考えだと思う。今社会に生きる人達の中で、やるべきことをせず、時間を無駄に過ごし何も後に遺すことをしない人がある。そういった人達は、死時後悔することになるだろう。これは僕が前から考えていたことで、それがこれに記載されていたことに驚いた。じぶんは前まで時間を無駄に過ごしたことを悔やんでいたもので、これを通じ今全力を出し後悔しないようにすることが非常に大事なことだと思う。これはこれからの人生で最も大切なことだと考えているのでこの先もこの言葉を心に留めて今頑張っていきたいです。

『B-P のラストメッセージを読んで』

BS 隊バイソン班 佐々木 海利

私はこのメッセージを読んで、ふと思ったことがある。

それは「B-P は本物のスカウトだった。」ということだ。なぜだろう。ごく当たり前の事のはずなのに、それだけがただ心に残ったのだ。

私はすかうとを「あり方」であると思っている。それはおそらく B-P がイメージしていたボーイスカウトの定義であるとしてまちがいないだろう。彼のメッセージはメッセージであって遺書ではない。そのことは、冒頭部分からよく伝わってくる。だから、私はこの文章を先人からの教えとして、心に残すことができた。それを自分なりに要約すると、B-P の伝えたかったことは誰でもスカウトになれるということなのだろう。だからこそ個々の「あり方」は無限大。皆が自分をスカウトであると思い意識して行動すれば誰でもスカウトに、模範、となれる。

B-P は「そなえよつねに (Be Prepared)」をどんな時も忘れるなとメッセージに遺した。ボーイスカウトであるうえで、最も重要な指針である。そして、文でなくメッセージとして遺すことで、見事、それを実行し、その絶大なる効果を我々の中に（ボーイスカウトがあるかぎり）永遠に示して見せた。それこそ私が本物のスカウトだったと思った一番大きな理由だろう。良い模範とは自らも学び実行することを示すことだと手紙 1 つで深く残してくれたことに、私は感銘した。

全員が「本物」である必要はない。だが少なくとも B-P のような「示せる」人に私はなりたい。そして、後輩たちにそれができるように、今も、これからも学び続けることが重要であると考えている。

拙い文章をここまで読んでいただけたことに、深く御礼申し上げます。

佐々木海利



Last Message from B-P

B-Pラストメッセージ

〈スカウト諸君！〉

“ピーターパン”の劇をみたことがある人なら、^{かいぞく}海賊の頭目がたぶん死ぬときには、最後の演説をするひまはないにちがいないと思って、いつもその演説をしていたことを覚えているだろう。私もそれと同じように、今すぐ死ぬわけではないけれども、その日は遠くないと思うので、君たちにさよならとわかれの言葉を^{おく}贈りたい。

これは、きみたちへの最後の言葉なのだから、よくかみしめて読んでくれたまえ。

私は、非常に幸福な人生を送った。きみたちみんなも、同じように幸せな^{しょうがい}生涯を送ってもらいたい。

私たちが幸せに暮らして人生を楽しめるようにと、このすばらしい世界に神様は生まれさせて下さったのだと、私は信じている。金持ちになっても、社会的に成功しても、わがままができて、それによって幸福にはなれない。幸福に一步近づく道は、少年のときに体をじょうぶに強くすることで、そうすれば大人になったとき、役に立つ人になる。自然研究をすると、神がこの世界を美しいもの、すばらしいものに満ち満ちた、楽しい所におつくりになったことがよくわかる。今^{あた}与えられているものに満足して、最善をつくし、物事に希望をもって、悲観的にならないようにしたまえ。

しかし、幸福を得るほんとうの道は、他の人を幸福にすることにある。この世の中を、君が受け継いだときより、少しでもよくしてあとに残すように努力したなら、死ぬ時が来ても、とにかく自分は一生をむだにしないで最善をつくしたのだという満足感で、幸福に人生を送り幸福に死ぬことができる。幸福に人生を送り幸福に死ぬために、この考えで常に備え、いつもスカウトの^{ちか}誓いを守り、大人になってもそれを忘れないことだ。どうぞきみたちにそれができるように、神よ、お守りください。

きみたちの友

ベーデン・パウエル・オブ・ギルウェル

(これは1941年1月8日にベーデン・パウエルが亡くなった後、彼の書きものの中から発見された)



第
7
章
1
奉
仕